

第1章 研究の背景と目的

2004年の文化財保護法改正により文化的景観が文化財体系に位置づけられ、2005年から重要文化的景観の選定制度が運用されている。棚田や茶畑など生業に根ざした景観が各地で選定され、2024年10月時点で73件に達する。一方、食育基本法の制定や和食の無形文化遺産登録を背景に、食文化と地域振興を結びつける動きが進み、生活・生業に根ざした「食の景観」を文化的景観として再評価する機運が高まっている。

本研究が対象とする「せんだんご」は、サツマイモを発酵・乾燥して保存する対馬の伝統食品であり、近年再評価が進んでいる。しかし、既往研究は自然科学的分析に偏り、風土や生活文化、景観との関係は十分に検討されていない。

そこで本研究は、本研究は、文化的景観の視点から食と景観の関係性を明らかにするとともに、対馬の伝統的保存食せんだんごを対象として、その生産空間と生産行為の特性を分析し、文化的景観としての評価および保全・活用の可能性を検討することを目的とする。

第2章 文化的景観と食の関係性

本章では、文化的景観における「食」と「景観」の関係性を明らかにすることを目的として、重要文化的景観73件の選定事例および日本各地の地域活動を対象に分析を行った。重要文化的景観の公式資料をもとに、KH Coderによるキーワード分析およびNVivoを用いたコーディング分析を行い、食に関わる構成要素とその特徴を整理した。あわせて、食文化と景観に関わる地域活動事例を収集し、制度的支援や実践の類型を比較検討した。

その結果、文化的景観における「食」は、生産環境と生産行為の相互作用によって形成される文化システムであり、人と自然の関係性や生活文化、歴史的記憶を可視化する要素であることが明らかとなった。また、地域活動は地域の持続性を支える一方で、制度運用や連携面での課題も確認された。

以上より、対馬の伝統保存食せんだんごは、地域の生活文化を体現する文化的景観の一要素として位置づけられる。本章の知見は、次章における対馬の具体的な事例分析に向けた基礎的視座を提供するものである。

第3章 対馬における「せんだんご」に関する文化的景観

本章では、第2章で整理した「生産環境」と「生産行為」の分析枠組みに基づき、対馬の伝統的保存食せんだんごを対象に、現地調査とヒアリングから生産工程の空間構成や生産行為を明らかにし、その文化的景観としての特性を検討した。

調査は、対馬市内4地区の農家を対象に実施し(図1)、サツマイモ栽培から加工、流通・消費に至る一連の工程に関わる活動空間を把握した。その結果、自然環境、建物および付随空間、農具・設備といった有形要素が工程に沿って連続的に機能し、生活文化と結びつくことで、せんだんご特有の景観構造を形成していることが明らかとなった(図2)。加えて、世代間で継承される技術や工程上の工夫、地域行事における利用といった無形要素が、物理的景観と相互に作用し、食文化の持続性を支えていることが確認された(図4)。

また、制度的検討からは、せんだんごに関する文化的景観が、農耕・水利用・居住空間の複合的關係によって成立しており、複数農家を単位とする選定範囲の設定を通じて、重要文化的景観として位置づける可能性が示唆された(図3)。

以上より、せんだんごに関する文化的景観は、有形・無形の要素が結びつく生活文化として捉えられ、対馬の食文化理解および地域資源の保全・活用に資する知見を提供する。

第4章 対馬における食と景観の地域づくり

本章では、第3章までの分析を踏まえ、対馬における食と景観をめぐる現状と課題を整理し、せんだんごを中心とした持

続的な地域づくりの方向性を検討した。

その結果、食文化は地域振興の基盤である一方、担い手の減少や生活環境の変化により、景観として捉えにくくなっていることが明らかとなった。これを踏まえ、生産環境の維持、学習機会の体系化、情報発信とブランド化の連動、ならびに重要文化的景観制度の活用可能性を提示した。

以上より、対馬の食文化を文化的景観として再定位し、その背景を含めて共有・活用する視点が、持続的な地域づくりに資することを示した。

第5章 総合考察

本章では、第2章から第4章までの分析を総合し、せんだんごに関する文化的景観の意義、研究の限界および今後の課題を整理した。本研究は、せんだんごを自然環境と人間活動の相互作用によって形成される文化的景観として再定位し、生産環境と生産行為を軸とした分析の有効性を示した。一方、調査範囲や期間の制約、口述資料への依拠、制度運用の検討不足といった限界も残されている。今後は、調査の拡充と分析の深化に加え、研究成果を地域と共有し、文化的景観を実践的に維持・活用していくことが課題である。

第6章 結論

本研究から、以下の知見が得られた。第一に、せんだんごは対馬固有の自然条件の下で営まれる生産・加工・消費を通じ、生活文化や共同体的関係を体現する文化的景観である。

第二に、有形・無形の要素が結びつく生産環境と生産行為の構造が、地域固有の景観を形成している。

第三に、食文化と景観を基盤とする地域活動や制度的支援は、地域の持続性向上に寄与し得る。

以上より、せんだんごに関する文化的景観の理解は、対馬の食文化の保全・活用および地域活性化に向けた重要な視座を提供すると結論づけた。



図1 研究対象地(長崎県対馬市。下線は調査地域)

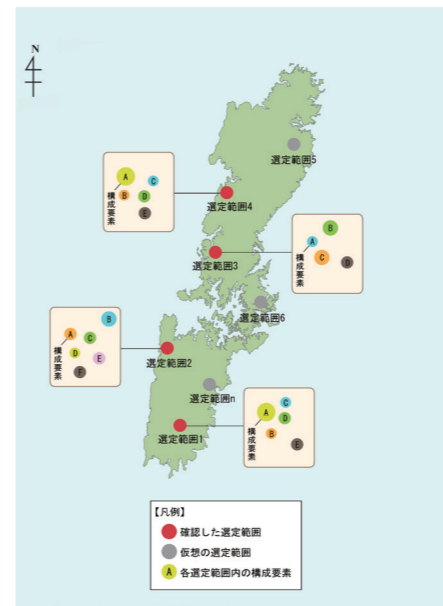


図3 せんだんごに関する文化的景観の選定範囲および構成要素の関係

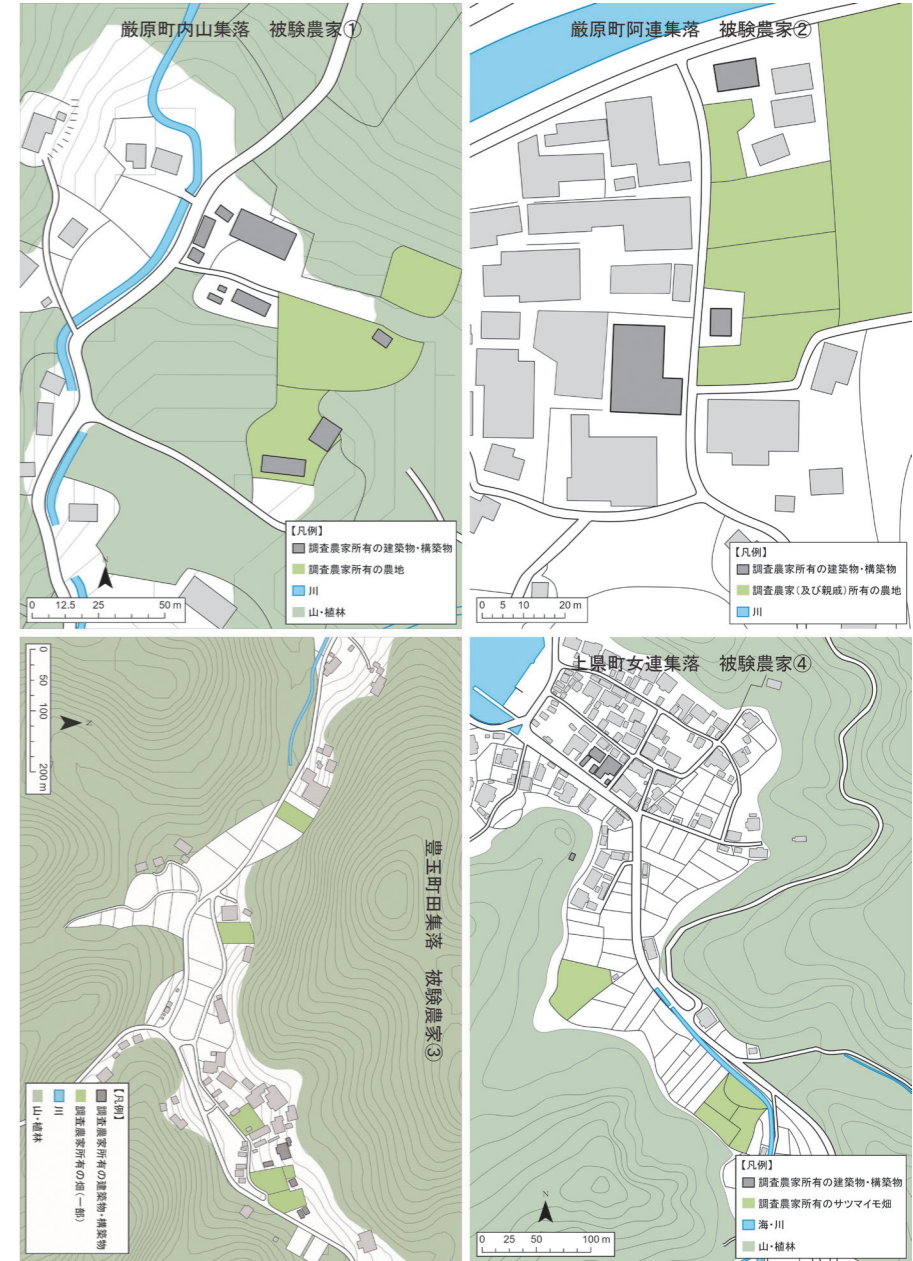


図2 各被験農家の空間配置図



図4 せんだんごを発酵・乾燥している様子(現地調査で筆者撮影)